

# 環

(あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	12
瑪瑙集	25
紅玉集	27
10月号月評	28
総合誌の窓	30
恵贈句集拝見	32
特別作品「オランダの娘を訪ねて」	34
琥珀集作品鑑賞	36
瑠璃集作品鑑賞 I	37
II	38
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	39
俳誌交歓	41
他誌転載	42
地層のゆくえ	43
靴の国父の蒼天 (19)	44
水上バス・大阪城中之鳥吟行記	46

今月の一句

しら露や轆轤こけしの匂ひ立ち

桂樟蹊子

(平成元年作)

鳴子の町のこけし店に立ち寄れたときのこと。こけしの木の香が、かぐわしく匂っている。樺か山毛櫨であろう。その轆轤の作業の手明りが窓からさしていたが、この窓の景が、しら露びっしりであったと言う。

隆子

# 中国の旅 その二

塩路隆子

慈顔なほ風化佛にみどりさし  
天秤荷下ろし露天の西瓜売り  
長江の濁り渦巻く夏の霧  
ゆるやかにかに荊州城の馬の磴  
関羽旗の城郭しかと青葉風  
風そよぐ三毛作の青田かな  
夕焼や田を鋤く牛の怒り角  
薄味の郷土料理のへちま汁  
たそがれの武漢にくもる夏の月  
流暢な日本語涼し玉売女

# 十月号光耀抄

飄々と幽霊の軸盆の寺  
思ひ出の詰まる振袖土用干  
ほたと落つ楊梅夕日浴びすぎて  
一粒をふふみ望郷山桜桃の実  
カクテルの色の誘惑下戸の夏  
いくさ世の文庫砦に三尺寝  
往還に見て奈良坂の氷旗  
酷暑とは地球の怒り身に浸みる  
遠雷に向うて走る湖西線  
今生の別れの牛や蠅払ふ  
ころび寝の白き足裏や青簾  
子と作る「戦艦大和」終戦忌  
怪獣の争ふポーズ雲の峰  
心太聞えぬやうに独り愚痴  
猛暑光千畳敷の海の碧  
宿坊の精進料理茄子の艶  
朝蝉やむかし軍都に平和の灯

坂上 香菜  
竹内 悦子  
小澤 菜美  
塩路 五郎  
北尾 章郎  
田下 宮子  
小林 成子  
山崎 里美  
三川美代子  
宮崎左智子  
藤見佳楠子  
阪本 哲弘  
石川かおり  
松岡 和子  
川崎 利子  
清水侑久子  
鈴木 照子

塩路 隆子選

太陽の光重たし炎天下  
 古代蓮に膨らむロマン花の彩  
 煮魚の目玉とびだす大暑かな  
 炎昼を柔和な顔の弥勒さま  
 膝の嬰に目高のうたを口ずさみ  
 種牛を生かす術なしはた神  
 リヤドロの少女に見ゆる秋思かな  
 江田島の遺書見て汗の涙拭く  
 浦上の祈りの鐘や秋澄みて  
 枝豆の飛距離を口へ受けるなり  
 葛饅頭来世とじこめたる形  
 日のほてり冷めやらぬ間の夏の月  
 両の手に伝助西瓜踏ん張る児  
 踊る輪に入れば羞ぢらひ薄れけり  
 截金の扉涼しく迎賓館  
 星涼しさらさら落ちる砂時計  
 日盛りに息潜めゐる家並かな  
 風乾きいっ気に麦の熟れて来し  
 湯上りはゆるやかに着て絵帷子  
 町衆の財を偲べり鉾祭

大島みよし  
 西田史郎  
 伊藤憲子  
 鷺見たえ子  
 大松一枝  
 笠井清佑  
 森下康子  
 宮田香  
 山口キミコ  
 常田創  
 吉田希望  
 笹井康夫  
 前川ユキ子  
 和田郁子  
 和田郁子  
 栗倉昌子  
 安本恵子  
 伊庭玲子  
 岡佳代子  
 小西和子  
 木戸宏子

脱落の道はるばると青芒  
 身の上を蚩袋に語る風  
 戦記物読み返しぬる夏座敷  
 鈴虫に水吹いてやる思ひきり  
 蝉の声鬼哭秘めたる城の濠  
 山頂へ蜥蜴と共にあと一步  
 大西日まともに受けて入鹿塚  
 峡の夜を妣の風吹く蚊遣香  
 梅雨寒の足裏焦がして火の渡り  
 大風車につられて揺るる百日紅  
 滝落ちて岩に一縷の白き帯  
 白雨来てやがて一つの空と湖  
 雨ながら鉾立ての縄からみゆき  
 雨上り芝の青さにサングラス  
 溪流のマイナスイオン床料理  
 ビル百窓入道雲の見事なる  
 待望の女兒誕生や月見草  
 夏痩せてなほ素麺を茹で昼餉  
 鮎宿で師匠と交す地焼酎  
 「三文の徳」信じて朝の草を刈る

片岡久美子  
 伊東 和子  
 青山 正英  
 杉本 綾  
 中本 吉信  
 坂根 宏子  
 井口 淳子  
 辻 知代子  
 福本スミ子  
 長濱 順子  
 山本 節子  
 山本 孝夫  
 横田 矩子  
 増田 一代  
 松田 和子  
 松田とよ子  
 秦 和子  
 中川すみ子  
 難波 篤直  
 能勢 栄子

腕より剥ぐも大儀や汗のシャツ  
 山影に蝸の声深みけり  
 男連四股を鼓舞せる阿波をどり  
 紫陽花にほほ笑む地蔵野の小徑  
 オペまでの大部屋樂し薔薇香り  
 漣に灯影のゆれて床料理  
 雲の峰お伽噺の城が見え  
 歌舞伎座にライندگانの水中花  
 滴りに古きみ仏竹生島  
 ががんぼや英単語の上辞書の上  
 剣山の如く天刺す稲の原  
 列島の夏粗暴なり眠れぬ夜  
 走り出す子の夏シャツは海の色  
 ともだちとソーランぶしでほんおどり  
 せみのからはっぱのうしろでかくれんぼ  
 すずしいなこおりいっぱい海の家  
 すいすいとめだかの赤ちゃん泳いでる  
 木のジュースカブトはいつも特等席  
 不眠症明るい都会で夜蝉鳴く

中村ふく子  
 高谷 栄一  
 田村 幸子  
 桂 敦子  
 北田 敏子  
 小林 久子  
 飯田美千子  
 池田加寿子  
 石田 康子  
 石田 祐子  
 上甫木伊都子  
 辻 香秀  
 村田 望  
 森下 千聖  
 土井ほのか  
 廣瀬 将也  
 塩路 彩奈  
 廣瀬 結麻  
 高野 綸

# 琥珀集

土用干

竹内 悦子

音羽山に餅の連鎖大花火 (琵琶湖花火大会3句)

江姫の花火絵巻や豪華版

花火果てみづうみ闇に空虚感

思ひ出の詰まる振袖土用干

今朝秋の欠片ひとつも見当らず

猛暑日も修行と悟れ気の軽き

暑くても志功裸婦にはなりませぬ

尾花沢

坂上 香菜

ゲリラ帰省

小澤 菜美

飄々と幽霊の軸盆の寺

石仏の見守る礎や鬼やんま

マイク手に女船頭赤とんぼ

備前壺に活けし紅花茂吉館

月山の霧霽れにけり尾花沢

紅花の豪商屋敷秋光裡

初もみぢ夕風通ふ小町塚

敗者をも讃ふ炎帝甲子園

大輪の昔花火を愛すなり

暑を払ふシヨートカットを思ひ切り

ほたと落つ楊梅夕日浴び過ぎて

葛切や夕べ漫ろに祇園みち

けふは散る蓮の疲れを風憂ふ

バイク音のゲリラ帰省や瞳笑み

山桜桃の実

塩路 五郎

原爆忌

田下 宮子

一粒をふふみ望郷山桜桃ゆすらの実

剥製の虎の目と遇ふ大暑かな

炎天下驢馬は優しき目を伏せる

風鈴の休む間のなき夜の宴

木琴の音の涼しさ打ちにけり

南風吹く石の地蔵に潮満ちて(御座)

大阪の川の匂ひや舟遊び

下戸の夏

北尾 章郎

水旗

小林 成子

川床料理深山の夜気を隠し味

フオーク・ナイフの我流涼しく婚宴

カクテルの色の誘惑下戸の夏

郷土史の編纂徹の蔵巡り

古書コピー紙魚の不在を確かめて

石を積む棚田の跡や草いきれ

スカイツリーの炎天衝くや鳶職とびの業

国連のトップ参列原爆忌

落日は川面を染めて広島忌

廃ドーム風化させまじ原爆忌

合歓の花親仔牛くる水飲場

民宿の貝殻風鈴海の風

宿題を終へたる子らの水遊び

いくさ世の文庫砦に三尺寝

奈良町の暖簾はためく夏燕

往還に見て奈良坂の水旗

命日に母の好みし湯引き鯉

母の忌を修してよりの喜雨至る

母ゆづり糠床今日も茄子漬ける

夕端居一時帰宅の夫と酌む

河鹿鳴き貴船祭の賑はへる

紫蘇ジュース

山崎 里美

「暑いね」と朝から電話母元気

異常気象人の仕業と思ふ夏

臥せる友立ち上がれかし雲の峰

夏バテに大鍋満たす紫蘇ジュース

天気予報耳塞ぎたき猛暑かな

羽音や羽化せし蝉の飛び立たむ

酷暑とは地球の怒り身に浸みる

遠雷

三川美代子

古刹より蝮出没大騒動

遠雷に向うて走る湖西線

歓声の後の静寂花火果つ

ばて気味の今日のメニューや鰻丼

怠け癖気をとりなほし夏の夕

里山の夕暮れ近し青田風

手花火の玉落つるまであきらめず

朝涼し

宮崎左智子

雨蛙罷り越したる狂言師

今生の別れの牛や蠅払ふ

白地着て少しうかれて若旦那

出目金を提げし幼児のえくぼかな

虫干や父に秘めごと比翼紋

干瓢の包帯のごと干されけり

朝涼し猫の身長測りけり

青簾

藤見佳楠子

大雷雨一気に鬱を拭ひ去る

些事一つ済ませし後のかき氷

ころび寝の白き足裏や青簾

蝉時雨浴びつつひそと十字架<sup>クル</sup>臺<sup>ス</sup>

マヌカンの細き指先秋を呼ぶ

絵手紙に鷺草翔けぬ秋立ちて

大文字終の鳥居の燃え始む

手花火

白服の男の子婚約告げに来る  
身じろぎをしたき刻あり水中花  
手は見せぬ爺の誅す油虫  
子と作る「戦艦大和」終戦忌  
香水の身が口遊ぶ反戦歌  
水子来て手花火の影一つ増ゆ  
黒日傘たたみて禱る爆心地

阪本 哲弘

夏の果

亡き人の齡数へて墓詣り  
そぞろゆく陶器まつりの秋涼し  
白檀の残り香ほのと秋扇  
怪獣の争ふポーズ雲の峰  
行きつけのデパート閉ぢる夏の果  
点々の炎繋がり大文字  
清流に冷し西瓜の縞模様

石川 かおり

心太

受け口を真似て鬼灯鳴らしけり  
偶然の出遇ひもありぬ合歡の花  
背を裂いて我も飛びたや蟬の殻  
三月後の予定を入れぬ百日紅  
待伏せむいつも揚羽の通る道  
ブゼラが熱さと暑さ煽りけり  
心太聞こえぬやうに独り愚痴

松岡 和子

大花火

蓮咲いて縁起絵巻の道成寺  
宝佛のあまねき慈愛蟬時雨  
幾万の人心の関大花火  
猛暑光千畳敷の海の碧  
水軍の砦の洞滴れる  
朝の陽に大蓮池の番鷺  
親族の集ふ墓前や霊迎へ

川崎 利子

若葉茶屋

良きドラマ終へたる静寂吊忍

着流しの僧の歓談若葉茶屋

宿坊の精進料理茄子の艶

網戸よりさやさやの風貫ひけり

知らぬ人語りかけ来る牡丹展

白川を渡す石橋風光り

上掛けを重ねて眠る梅雨寒し

清水侑久子

炎天

大島みよし

太陽の光重たし炎天下

炎天下草縮みをり河川敷

喉仏突き上げて呑む麦茶かな

どの母がどの児の親か水遊び

風の色作つてをりぬ夏の草

夏帽子脱いで川風もらひけり

夏の蝶ゆれて飛び立つ草の丈

広島の夏

鈴木 照子

蓮

西田 史郎

夏空へ折鶴捧ぐ少女像 (原爆の子の像)

朝蝉やむかし軍都に平和の灯

夏逝くや人影残る被爆石

汗引けり被爆の瓶の柔らかき

水飲み場ありて涼しき祈念館 (原爆死没者追悼祈念館)

原爆ドーム巡る猛暑や口渴き

蝉の下核廃絶の署名せる

古代蓮に膨らむロマン花の彩

夜の雨を葉に転がして蓮の花

鉄剣の古墳の夢や蝉しぐれ

江戸切子の風鈴鳴らす宵の風

「異常なし」の診察帰途や蝉しぐれ

故郷の思ひ出ふつと竹風鈴

熱帯夜絆癒しき電話かな

芋の露

梅雨明や笛吹ケトル高く鳴き  
煮魚の目玉とびだす大暑かな  
銚粽両手に受けし軽さかな  
うすれゆく爪の半月終戦日  
句を案ず羊かぞへて熱帯夜  
明星の零してゆきし芋の露  
抜きんづる白蓮一花風生るる

弥勒菩薩

ふたたびは許すまじきよ原爆忌  
炎昼を柔和な顔の弥勒さま  
弥勒寺蓮の花がお出迎へ  
夏日背に華麗に舞へるイルカシヨ  
水色の蜻蛉飛び交ふ水の辺に  
熱帯夜眠れぬ夜を寝返りぬ  
杉苔にひそとたたずむ桔梗かな

伊藤 憲子

鷺見たえ子

夏衣

夏衣重ねて雨のひと日なり  
野に咲きて淋しがりやの文字摺草  
膝の嬰に目高のうたを口ずさみ  
老鶯や詩集の余韻しみじみと  
水柱にうれしき笑顔街の子ら  
炎昼の門扉くるぐる黙しをり  
朝庭をほしいままなる蟬の声

糺の森

種牛を生かす術なしはたた神  
肩欠けし芭蕉の句碑や青葉闇  
図書館の書架整然と秋立てり  
細りゆく修験者の道草いきれ  
燈花会の点灯奉仕汗の児等  
古書市や糺の森の桐一葉  
古書市の店主の齡今朝の秋

大松 一枝

笠井 清佑

# 瑠璃集

原爆忌

山口キミコ

八月の長崎の空まぶしかり  
如己堂を訪うて無言の長崎忌  
天を指す座像の右手原爆忌  
噴水を一段高く爆心地  
浦上の祈りの鐘や秋澄みて

飛距離

常田 創

夏の終はり子らは悲しく遊びけり  
哲学を嫌ふ次男の夏の風邪  
秋の山白んで始発列車かな  
枝豆の飛距離を口へ受けるなり  
京極にカリフォルニアの檸檬一つ

片蔭の一部

吉田 希望

葛鰻頭来世閉じこめたる形  
麦茶煮て一人暮らしの予行とす  
片蔭の一部となりて抜け出せず  
風絶ゆる古本市に太宰かな  
干されたる時が主役や白きシャツ

アニメ浴衣

森下 康子

リヤドロの少女に見ゆる秋思かな  
雑踏に迷彩服や終戦忌  
桐一葉マンション住みとなりけり  
髪染めてアニメ浴衣のペアルック  
朝涼やログハウス窓全開に

江田島

宮田 香

夏海の光眩しく巖島  
磯蟹を追へば社殿の柱礎かな  
清盛の情熱加へ島炎暑  
江田島の遺書見て汗の涙拭く  
「海軍」はなほ江田島に蟬時雨

## 十月月号月評

塩路 隆子

五十五号がお手元に届く頃は少し涼しくなっていると思うが、只今は猛暑の最中、思い切りクーラーを利かしての作業である。毎月五句のみの投句の人達のなかにも、充分に七句投句の実力をつけて来た人達がいる。多い人は、一カ月に十四句から十二句を見せていただいている。当然二か処の句会またはNHKに参加されている。何時までも五句に甘んじていないで、琥珀集に挑戦する努力を惜しまないでいただきたい。

### 飄々と幽霊の軸盆の寺

坂上 香菜

筆者も一度京都の寺で幽霊の軸を見たことがある。薄暗いところに展示してあった、少しばかり気味悪い様相はいまでも忘れない。この句の「飄々」が「如何にも」と納得の行く措辞である。毎年やって来る盆の寺にはこの幽霊の軸が呼び物になっているのかも知れない。

### 思い出の詰まる振袖土用干

竹内 悦子

人にはそれぞれの過去がある。過してきた人生がその人の人格を作り上げ現在があると思っている。作者は今思い出が一杯詰まった振袖に風を入れていく。さて作者はどんな思い出を持っているのであろうか。その一端を一度お聞きしたいものである。いまも大切にされている振袖、それには母と子の深い繋がりを感ぜさせるものがあり、またそれを支える父親の温かい眼差しが感じられる。どうか何時までも思い出と共に大切にしていきたい振袖である。

### ほたと落つ楊梅夕日浴びすぎ

小澤 菜美

守山にお住まいの作者であり山里と言うよりも、琵琶湖を題材にした静かな句をよく詠まれる作者である。この句も夕日を一杯に浴びる楊梅を、じつと見つめる静かな作者の姿が浮かぶ。なんとと言っても「夕日浴びすぎで」の措辞に惹かれる。そんなことで落ちる筈のない楊梅を見る眼差しこそが深い作者の詩情である。